

「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけか(Ⅰコリント 15:12)」。

コリントの「神の教会」宛ての手紙で、「召されて聖なる者とされた人々(1:2)」の一員が「死者の復活などない」と公言しているらしい。

口に出さずとも復活を訝しむ者が少なからずいたから、強い口調で信仰の原点を示したのか。

コリントはギリシアの港湾都市でアテネの近く。アテネでは特権市民が哲学論争にふけていた(使徒 17:21)。市民はパウロの教えに関心を示したが(17:19)、「死者の復活ということを知ると、ある者はあざ笑い、ある者は〔それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう〕と言った(17:32)」。

コリント教会の土壌にはギリシア文化が染みついて、「からだの復活」の受容は難しかった。

その一方で異言を語る熱狂信徒もいて、彼らには「霊」による冷静さを求めている(Ⅰコリント 14:13~15)。初期キリスト教会の信徒には相当の幅があり、党派争いもあからさまだ(1:11~12)。

家の教会である当時の信仰共同体は、怜悯と熱狂が混在し、信徒同士も対立する、混沌としたきわどい道を進んでいた。

「自分は何の信仰も“持って、いない」という人たちに、自分が死んだ後のイメージはあるか、と尋ねたことがある。おもしろいことに彼らは、共通して「魂が肉体から離れて宇宙生命に吸収される気がする」と答えた。

これは「靈魂不滅」という世界共通の宗教心性で、ギリシア文化もこうした宇宙観が支配的だった。霊だけが永遠で、身体性に関わる「死者の復活」には拒絶感があるのだろう。

パウロは「死者の復活がなければ、キリストは復活しなかった(15:13,16)」と、「復活」が信仰の核心であることをくり返し告げる。それでは「死者の復活」と、世が承認し易い「靈魂不滅」では何が違うのだろうか。

「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになる(15:17)」。靈魂不滅のイメージなんて虚しいだけじゃないか、と。

キリストの「復活」と人間の「罪」が関連づけられている。つまり復活は十字架と表裏一体で、ぼんやりと曖昧な永遠性のことではない。

「わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていた(2:2)」。すなわち十字架があつてこそその復活なのだ。

十字架はどれほどの愛によって為されたのか。あのキリストの死と圧倒的な赦しがなければ、復活の信仰は世が言う靈魂不滅とさして変わらず、曖昧で虚しいものとなろう(15:17)。

「陰府に置かれた羊の群れ、死が彼らを飼う(詩編 49:15)」。死の支配に人間はどうしたって抗しえない。「しかし、神はわたしたちの魂を贖い、陰府の手から取り上げてくださる(49:16)」。

そうだ、死者の復活には「贖い」が明確にある。神の御子の、神御自身の命と引き換えに、私たちは神の御許に買い戻される。

十字架の贖いと罪の赦し、それを為さしめた愛を、じっと見つめ、じっくり噛みしめ、心震えることで「死者の復活」は真実となる。十字架がずっしり重くあつてこそ、復活は真実となる。

私たちの復活は終りの日に起こるが(Ⅰコリント 15:23~24)、今日この瞬間が、その日に直結している。



《おまけのひとこと》

肉はやがて焼かれるか地中でアミノ酸に分解される だが「からだ(soma)」は肉ではない 霊と混合した私という存在とでも言えようか 肉は土(ダマ)に還り からだは復活する 永遠の私として